

海軍

第八海防艦物語

鹿児島県 松田 昇

—軍隊生活について、特に戦争でご苦労なさいましたことを、お話下さい。先ず海軍へ入団されたことか
ら。

私は志願した者です。昭和十八年四月十八日入団しました。佐世保第二海兵団で新兵教育を二か月受けました。六月三十日横須賀海軍航海学校に入学し、信号術練習生として六か月教育を受けました。

十二月二十八日海軍航海学校十一期普通科信号講習を修了しました。

—学校訓練はどのようでしたか。

視覚信号が主で航海術等を学びました。

主に電信でやるモールス・電気の点滅・手旗・旗流信号といつてマストに旗をかかげる信号などでした。

—旗流というのは、日本海大海戦で東郷大将の乙旗のようなですね。当時巷では海軍の勤務についての歌があります。「月月火水木金」といいましたが、学校では休日がありましたか。

日曜日は休みで外出もできませんでした。昼食なんか食べさせる下宿屋という会館がありました。よく行ってきました。

—学校を十二月に卒業されて現隊復帰ですか。

佐世保海兵団に帰りました。一か月ほどのちに長崎に行き、当時国民からの義捐金第一号で建造された軍艦を三菱長崎造船所で受け取り、現場で一か月諸設備の点検

をしながら勉強をしました。その後この艦で終戦後まで勤務しました。

—その軍艦の名称は何といたうのですか。

「第八海防艦」といいました。それから二か月ほど瀬戸内海において、実戦訓練を受けて、その後外洋に出ました。

—昭和十九年春ごろからは、各海戦での敗北のニュースがはいつてましたが、はじめての外洋勤務ですと緊張されたことでしょうか。

最初のころは案外気楽な気持ちでした。終戦までは軍艦や輸送船が米海軍の潜水艦の攻撃で沈没するのを、全部で三十八隻目撃しました。そして昭和二十年になってからは、もう日本も駄目だと感じるようになりました。

—私も鉄兵団の一員として満州から南下し、門司で船団を組んで台湾に渡り、十九年十二月高雄からフィリピンへ上陸しました。そのころはどこで勤務されていましたか。

その当時はフィリピンへ輸送船の護衛になんども行きました。今いわれた鉄兵団（第十師団）、虎兵団（第十九

師団）、旭兵団（第二十三師団）の護衛もしました。

—エッ！　そうですか。今四十有五年過ぎてあのとき、私の乗った「大威丸」を、いや僚船も快速で前後左右と走りまわって警戒して下さった海防艦に勤務しておられるとはなんと不思議な因縁ですね。

今思い出しても、あのときは米軍の潜水艦の交代する時だったのでしょうか。魔のバシー海峡で二隻の敵艦にも遭遇しませんでした。私の軍艦はよく働きました。今も私は誇りに思っています。略して「海八」といって他艦の連中にも親しまれました。なにせ愛国第一号艦ですからね。艦全体に愛着を感じました。

—「海八」の搭載兵器はどのようでしたか。

対潜水艦用武器が主力でした。十二センチ砲が前方、後方に各二門、十六ミリ機銃の単連装が二台、八連装が六台ありました。主武器は対潜用爆雷です。一発の重量が六十キロです。一度に十二発発射できるしくみになっていたと思います。

—古いことですから正確な数字はわからぬでしょうが、よく記憶しておられますね。爆雷発射の時は急

速前進ということでしょうね。

そうです。自分の発射した弾で自爆すると大変です。

速く走って敵のまうえに投下します。深度も三十メートル、六十メートル、九十メートルと真管をセットして水面下三十、六十、九十メートルで爆発させるのです。水中探信儀といって音波を発信して返ってくる波長で敵潜の深度をはかる。もう一つは聴音器で潜水艦の機関やスクリュウの音きょうをきいて測定し攻撃しました。「海八」は船団護衛が目的で建造されましたので、潜水艦と飛行機には絶対自信を持っていました。また敵の潜水艦は輸送船やタンカーが一番の護物ですから、狙われた時は全装備を最大に活用して攻撃を加えました。

—当時の基地（港）はどこですか。

第一海上護衛隊で司令は台湾の高雄にあり、司令官は鹿兒島出身の野村直邦中将でした。

第一回護衛は昭和十九年四月に門司から昭南島（シンガポール）でした。その名称は門昭船団というようだった。

—私達の船団ですと門マ鉄船団ですか。

いや、番号でした。門マ〇号といったと思います。確かではないがそうでした。

—やはり暗号とか、略号とかになっていたの。

そうでした。当時南方輸送船団の護衛は、日本の港を出たのち、中国大陸ぞいに南下しました。というのは陸地側は手薄で外洋側を重点的に、片面警戒で航行出来ますし、成果も十分あげていました。そのうえはじめてのころは航空母艦の「海鷹」や「沖鷹」などが一隻同航してくれました。二回目の時は仏印（ベトナム）行きでした。同僚の海防艦が攻撃を受けてごう沈するのを目撃し、はじめての体験で気がどうてんした。

ただなにかを一生懸命しゃべるといふか、わめいたの（で）しょう。

—私も僚船の遭難救助に行った時に惨たる光景でした。筆にも話にも出来ないのです。

そうです。油でやけどの人は焼肉の腐ったような臭いで飯ものどにつかえて食えませんでした。

対潜水艦攻撃の時に標識として竹を十文字に組んでそれに旗をブイにします。救命ボートで救援に行くと、そ

の標識ブイに二、三人が取りすがって泳いでいました。海難事故のときはなにかにつかまって泳ぐこと、水面より少しでも高い者が早く船を発見できることを体験しました。

—そうですね。輸送船には竹製の救命筏を甲板にたくさん積んでいます。船は沈んでも筏は浮きます。その筏の下に泳ぎの不得手（金槌）な者が入って顔だけ竹の間に突っ込んで助けを求めている。救命胴衣を取って、もぐってそとへ出るんだといっても、水がおそろしくて、そうしたことが出来ずこまったと話していました。海軍の人は水練が達者でしょうが、

沈没時に機関部関係の人はどんな状況でしたか。

海軍は皆泳ぎますよ。戦闘配置とか第一配備、第二配備とか、いろいろありましたが、普通の場合は四直制で（四交代）で警戒勤務をやります。私は艦橋勤務でした。上官からたえずお前たちはよく見張ってくれといわれたら助かる者は少ないのです。一千屯以下の海防艦の僚艦がごう沈されましたが、ごう音と火柱につづいて水

柱が立ちました。その水煙が消えた時は、なに一つありませんでした。艦長以下全員が一瞬にしてみずくかばねとなられました。私たちも艦長以下全員が一丸であるということを眼前にして、各人の任務を忠実に努めることが最大最善の方法だと知りました。

—陸軍も輸送船上では、海上と空の見張りを四交代制でやりました。不慣れた船上のために苦労しました。一番に船酔い、二番に荒波で水面上の見きわめがむずかしかった。潜水艦の潜望鏡だと騒ぎ、よくみると一升壺だったことも。

見張りは徹底的に訓練されました。夜間などは特殊教育で船影をみて何艦というように。とくに米軍の戦艦や空母の場合は名称まで暗記して識別できました。夜は夜光虫に弱りました。また燈火管制で光をそとにもらさぬように細心に注意し、そのうえに小さな光を出す装置を取りつけて交信しました。また管制時に艦尾信号燈というのでおこないました。これは艦尾の菱形になったところに、小さな電灯がつくようになっていて、とくに駆逐艦がもっていて、これだけで魚雷用意、攻撃開始とか特

別用語が多く、海軍当事者でないと不明な言語が多いです。

—電波とか光波でなく、電球に点灯しただけのいわゆる動的でなく静的信号ということ。

—そうです。米軍の物量攻撃に対して、大和魂でござって戦ったのです。今にして思えば科学をとりいれてなかったと思います。濟州島の沖で、戦友が乗船していた駆潜艇が、ロッキードP38からのロケット弾一発で轟沈しました。

—双胴の機で空の道化者といわれましたが、いやなやつでした。私もあれにはいやな思いですがありますね。

あの飛行機は航続距離が長くて、海上では偵察し爆撃を行いながら哨戒もやっていました。日本は米国の物資と科学に負けましたよ。

—終戦までに、内、外地の港を何回くらい行き来されましたか。わかりましたら一つどうぞ。

—シンガポールに三回、佛印(ベトナム)一回、マニラが主で四、五回ぐらいだったです。そのなかで軍艦が一

度故障を起こして、マニラのキャピテン港で一月ドックいりして機関の修理をしました。完了して帰港命令により出港しました。

—途中命令変更で、ボルネオのミリに行きました。あの辺の海はなん海里も黄色に変色していました。上陸して少し歩いたら陸軍の墓地があって、墓標に街の出身地の名前がありました。心からご冥福をお祈りいたしました。

—港から重油を積んでタンカーを護衛して日本へ向かいました。途中からビルマからの陸軍の病院船「ウラル丸」も同行しました。比島サンフェルナンド沖あたりで駆逐艦「夕凧」が「我今より、貴船団の護衛に任ず」といつて近づいて来ました。そのすぐあとで敵潜水艦の魚雷を受けて「夕凧」は沈没しました。警戒は厳重にしていたのですが、「夕凧」も日本軍の船団だちょっと気を抜いたのでしょう。

—しばらくして病院船「ウラル丸」が攻撃され被弾しました。沈没までちょっと時間がありました。そのためほとんどの人が救助出来ました。(戦争は無茶苦茶です。赤

十字の病院船でも沈没させるのです。看護婦さんと三十人ぐらい救助しました。そうした人たちを輸送船に乗せかえる時に看護婦さんが泣きながら

「水兵さん、このまま軍艦に乗せて、内地に連れて帰って下さい。食事はにぎり飯一つでよいから」

と叫んだ。その声は今も耳に残っています。一度新聞社に取りあげてくれとたのんだが、いまだ音沙汰なしです。病院船「ウラル丸」です。攻撃がげしく、ようやく香港の港に逃げこみました。このとき一隻の船が助かっただけです。私は知りたいのです。またそうした方々のご遺族の方も知りたかろうと思います。

(注、松田氏の目に光るものをみた)

―残念ですね。「ウラル丸」の乗船者は結局全員がみずくかばねとなられたのですね。

病院船に鹿児島の人がいきました。同郷のよしみでちょっと話をしました。母方の里の人でした。叔父がビルマ戦線にいつているのでたずねたら、無事で働いているとききました。

その叔父は戦後復員しました。あの方はあの海で護国

の神とられました。私は香港での一隻を護衛して門司港まで帰りました。夢のような現実でした。この時のことは私は死ぬまで忘れることが出来ないでしょう。

―当初その時の船団は何隻いたのですか。

十隻いたのが門司では一隻でした。第一の護衛は重油船でした。この油槽船は全部海のもくずとなりました。一万屯級のタンカーです。アメリカにするとくに油槽船を最重要攻撃目標にしていたと思われます。長距離航路の間、ズーッとつけねらって、一隻また一隻と攻撃して来たのです。

こちらは一生懸命走って警戒していますが、敵は前にまわって夜間これらの船団の近づくのを待って攻撃してきたのです。

―本当に残念でしたね。

もう少し軍艦があったら、こんな無残な状態にはならなかったと思います。前に申しました鉄兵団の護衛をした時には、みごとなほどぶじに送ることが出来ました。一つの輸送船に陸軍の人が七千人ぐらい乗っておられましたが、げき沈されるとほとんど全滅でした。とくに夜

襲が多く、ついで夕ぐれせまるころとふつきようでした。夜間の場合、夜が開けて救助にいくと救命具をつけて浮かんでいますが全部死体でした。

まあ満州から比島へ行かれた部隊は陸軍の虎の子だといって、全力をあげて警戒しました。無事に送らせてもらい、揚陸後は知りませぬが、無事港にはいったという時が私達は一番嬉しかったです。海軍魂の一端でしょうか。

—これまでが昭和十九年の年末で、これから以降はどのような行動になりましたか。

二十年一月に六隻の海防艦で第二海防隊を編成しました。司令は新潟県出身の阿部大佐で、その指揮下にはいました。その時シンガポールへ二隻の輸送船を護衛するにあたり、

「君達の生命は私がもらう」

といわれ

「これが最後か」

と思った。

無事にシンガポールに着きました。帰りに「立川丸」

という船が佛印（ベトナム）のカムラン湾（日露戦争の時、バルチック艦隊の假泊したところ）で敵の潜水艦攻撃で沈没しました。軍艦はぶじに日本に帰りました。これが最後の南方でした。それから近海で活動しました。

朝鮮の蔚山やゲン水等を往復しました。終わりには輸送船の代役で大豆なんか食糧を運びました。

その後、舞鶴港を母港としました。そして大湊警区の指揮下にはいり、津軽海峡の警備等をやりました。そして八月十五日、函館の港で終戦の詔勅をききました。

「ああこれで戦争は終わったのか」と半信半疑でした。しばらくして佐世保への帰港命令ができました。その時、日本海でソ連の潜水艦がときどき浮上して私たちをかん視するようでした。私たちは終戦といっても、正規の命令を受けていないので、ときどき爆雷を投下して帰りました。艦は唐津の沖に沈めるのだといってましたが、佐世保の軍港に無事に帰りました。その時アメリカ軍が進駐するということで、せまい水道を通して大村湾にはいり、待機していました。武装解除の命令で砲や火器を取

りのぞきました。そして外地からの引き揚げ船として最後の使命をはたすことになりました。

—すべての火器弾薬を撤去されますと、身軽で行動が自由になりましたのでしよう。輸送人員は何人ぐらいいできましたか。

おおむね三百人ぐらいを一度に乗せて帰りました。フィリピンのミンダナオ島のダバオの在留邦人の引き揚げで、おもに婦女子でした。その時現地の港で驚きました。米軍の自動車に日本人を乗せてきて、そのまま海に乗り入れ本艦に横づけにして人の乗降をするのです。本当にびっくりしました。水陸両用の自動車だったのです。

—日本軍とは武器も機械もすべて雲泥の差がありますね。

艦の油が不足したので、アメリカの船から燃料をもらって帰りましたが、対空対潜等の警戒もなしで海上航路をドンドン走って帰り、鹿児島湾にはいり、引き揚げ者を上陸させました。皆さんの顔が、ヤレヤレとあんどのいろでした。私も気持がスカッとしました。

—引き揚げ船はそれからもずっとやられましたか。

私は長男ですから帰れといわれていました。陸路呉の海兵団へいって、復員の許可をもらって、昭和二十年十一月三十日自宅の門をくぐりました。

—実役二年八か月の任務を終わらせて帰られた時の気持は、当時の外地にあった人は皆同一でしょう。

誠に貴重なお話を発表してくださいましてありがとうございます。ございました。

海軍航空隊員従軍よもやま話

福島県 物井 與太郎

(旧姓佐々木)

私は帝国海軍軍人として、昭和十八年十月一日横須賀第一海兵団へ二十四歳で召集され入隊しました。

昭和二十一年十二月復員、名古屋港へ上陸するまでの間(軍隊の最終の階級は上等水兵)主として比島地域において体験した大東亜戦の従軍のよもやま話を致します。